

令和元年度 学力向上プラン

学校名

中央区立月島第二小学校

学校の教育目標

心の豊かな子ども・よく考える子ども・たくましい子ども

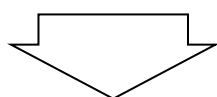
学校経営方針（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・基礎学力を確実に身に付けさせるとともに、一人一人の習熟度に応じて学力を伸ばす指導を行う。
- ・児童自ら課題を発見し、主体的に問題を解決する力を身に付けさせる。

平成30年度「学習力サポートテスト」「東京都学力向上を図るための調査」「全国学力・学習状況調査」の結果分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	国語の読む能力については、5年生では、全国平均を6.7ポイント、6年生でも、東京都の平均を5.0ポイント上回っている。読むことについては概ね、力として身に付いていると考えられる。 反面、書くことについては全国平均より3.1ポイント下回っており、課題である。今後、書く活動を多く取り入れる授業展開の工夫を行うなどし、自分の考えを的確に表せるような力を育てていくようにする。	普段から、自分の考えを文章に表す活動の回数が少ないことが要因と考えられる。また、作文など、書く活動が普段から少ないと思われる。
算数・数学	ほぼすべての観点で、全国平均や東京都の平均を上回っている。しかし、数量や図形についての技能が中央区の平均を4.2ポイント下回っている。関心・意欲・態度も5.5ポイント下回っている。	児童が意欲をもって取り組めるような教材開発や授業展開になっていない。また、技能面等に大きくかかわる計算力の未定着も課題である。
社会	5年生では、どの観点も全国平均より3～5ポイント上回っている。また、6年生も東京都の平均よりも7.8ポイント上回っている。反面、社会的な思考・判断・表現については区平均を1.9ポイント下回り、目標値に到達しなかった。	社会科に対する知識・理解度は高い。しかし、文章やグラフを読み解く力を十分に身に付ける指導の工夫が足りなかった。
理科	各領域について、全国平均や東京都の平均を上回っている。しかし、自然事象への興味・関心・態度は7.3ポイント、「物質・エネルギー」の領域については、6.3ポイントほど全国平均よりも下回っている。	自然事象について、観察や実験を行う環境が少ないことがあげられる。
体育	本校の特色であるなわとび活動を取り入れていることで主体的に運動している。体力調査の結果、長座体前屈と握力が大きく平均を下回っている。	運動の基礎となる体づくり運動については、どの学年も十分に行っている。他方、体育の準備運動に柔軟性の力が伸びる要素が足りないと思われる。

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
①学力基盤	学習内容を深く理解し、発達段階に応じた学習の資質・能力を身に付け、児童自らが主体的に学ぼうとする姿勢を全児童に身に付けさせる。
②授業改善	全教員が、言葉の学習や作文について、言語の知識・理解・技能の習得のために、個別指導の充実を図る。学力サポートテストの国語（書くことの領域）において、区の平均に達するように6ポイントアップを目指す。
③教員の指導力	どの授業においても、全教員がユニバーサルデザインを意識して、児童の90%が「楽しい」と思い、自ら積極的に取り組むような授業づくりを目指す。
④家庭との連携	家庭学習の定着率を学年において、90%を目標とする。また、保護者の児童への働きかけを具体的に示し、生きる力を育む。
⑤体力向上	全児童に対して体力向上に向けた取り組みの充実化を図る。児童の体力づくりにおける肯定的な自己評価をしている児童の割合を6%あげる。



【目標達成のための具体的な取組内容】

①学力基盤	
取組Ⅰ	児童の実態に合った各教科、領域の年間指導計画を作成し、計画的な指導をくり返し行い、基礎・基本の確実な定着を図る。
取組Ⅱ	指導時間内に、どの児童も「わかった」「できた」ということが、実感できるような教材開発・授業展開の工夫を行う。
取組Ⅲ	各教科では、ユニバーサルデザインの視点に立ったどの児童にもわかりやすい授業展開を目指す。そのために、教師の発問内容を吟味し、綿密な板書計画を立てる。

②授業改善	
取組Ⅰ	算数では、単元ごとにレディネステストを行い、コースガイダンスに基づいたクラス分けをすることで、習熟度に合わせた指導を行う。
取組Ⅱ	パワーアップ学習や放課後・夏休みの「さんすう塾」などを活用し、学習の定着に不安のある児童には、東京ベーシック・ドリル等を活用し、個別の指導を行う。

取組Ⅲ	ユニバーサルデザインの考え方にに基づき、児童から「もっと学びたい」と思わせるような授業の進め方を推進する。
-----	---

③教員の指導力

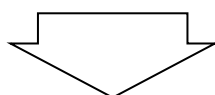
取組Ⅰ	校内研究授業で、ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくりについて研究を深め、教員の学習指導力の向上を目指す。
取組Ⅱ	若手教員の授業力向上のため、OJT研修を月に1回実施する。主任教諭が授業を行い、その授業について協議会を行う。司会進行や協議会運営は、若手教員が進められるようにする。
取組Ⅲ	教員相互の授業力向上のため、研究授業の事前授業を公開とし、学校全体で、教員の授業力向上に尽力する。

④家庭との連携

取組Ⅰ	各学期に一週間程度、家庭での学習を推進する「家庭学習キャンペーン」の内容について、子どもと一緒にパソコンを使って調べたり、新聞に書かれたことを話したりする、など具体的な例示をする。
取組Ⅱ	個人面談・保護者会等で、児童の学習状況や努力の様子を伝えたり、個人の課題を伝えたりすることで、保護者と共通理解を図り、連携を強化していく。
取組Ⅲ	学校だより、学年だより、学級通信等で学校での取組や学習内容等、家庭に対して、分かりやすい言葉を使って発信していく。

⑤体力向上

取組Ⅰ	体力調査の結果を分析し、児童の体力や運動能力を客観的に把握することで、課題となる運動能力の向上に向けた取り組みを推進するとともに、体育の授業やスポーツ活動に関する指導の充実を図る。
取組Ⅱ	体を動かす遊びやマイスクールスポーツに加え、基礎的体力・バランス力の向上を目指すコーディネーショントレーニングの要素を入れた準備運動を授業に取り入れる。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題
①学力基盤	児童の実態に合わせた教材開発や・授業展開にしたことで、学校評価において「学習がおおむね楽しい」と答えた児童が、96%になった。主体的に学習に取り組む姿勢が身につけている成果としてあげられる。	学習内容を分かりやすくしたため、学習に対して思考が深まったか、という点においては課題が残った。もっと違う点からのアプローチが必要である。また、学習指導要領改訂を踏まえて、児童の実態に合わせた年間指導計画の作成が必要である。
②授業改善	学習力サポートテストの国語全体では、区の平均に1.9ポイントと近づけることができた。また、4～6年の国語の書く能力の領域において、区の平均をおおむね上回ることができた。	全教科の平均では、6年生以外区の平均値に達していないため、来年度に向けてパワーアップ学習の充実と「さんすう塾」における補習授業の強化が必要である。
③教員の指導力	全教員がユニバーサルデザインの視点をもって普段の授業から取り組んだ成果、93%の児童が「授業の内容はよくわかる」と解答した。また、教員も児童が楽しいと感じている実感をもって授業づくりをしている。OJT 研究授業を通じて、若手の教員の指導力向上が見られた。	若手だけでなく、中堅やベテランの教員も同じように授業作りをしていかななくてはいけない。そのために若手対象のOJT 研修だけでなく、全体で行うOJT 研修も作らなければならないと感じている。
④家庭との連携	家庭学習キャンペーンは、家庭学習の定着に一定の成果をもたらした。今後も続けていくことが必要である。 また、個人面談や保護者会等で児童の学習状況や生活態度を伝え、共通理解したことで担任と保護者との信頼関係を構築できた。	学校だよりの発行が遅くなってしまったことや、保護者に対してもっと分かりやすい言葉を意識して使わなくてはならない。保護者の約23%が分かりにくいと学校評価で答えている。また、学校は保護者にとって連絡や相談がしやすいと回答している保護者が78%で、80%を下回っている。「困っている」という視点で、より丁寧な対応をしていく。
⑤体力向上	今年度は、ギネス記録に挑戦することになり、それに向けて学校全体で二重跳びに取り組んだ。授業だけでなく、休み時間にも二重跳びを練習している姿が多く見られた。なわとびコンクールでも高い成績を修める児童が増えたことが大きな成果である。	体力づくりの児童の意識が横ばいである。昨年度と比較しても児童が自分の体力づくりに取り組んでいますか、という質問に84%の児童が取り組んでいると答えている。この値を伸ばすために今年度足りなかった、コーディネーショントレーニングの要素を取り入れた準備運動を広めていく。